

遺跡にのこる伝承—岩手県盛岡市のいくつかの事例

TRADITION IN ARCHAEOLOGICAL SITES: SOME EXAMPLES FROM MORIOKA CITY, IWATE PREFECTURE

今野 公顕 (岩手県立大学大学院総合政策研究科)

KONNO TADA AAKI (GRADUATE SCHOOL OF POLICY STUDIES, IWATE PREFECTURAL UNIV.)

遺跡 / ARCHAEOLOGICAL SITES
 伝承 / TRADITION 住民 / RESIDENTS
 社会における価値 / VALUE IN SOCIETY

はじめに

本稿では岩手県盛岡市における遺跡に伝わる伝承や地名の由来のいくつかの事例を紹介し、その意義を検討する。これらの事例は、筆者が盛岡市教育委員会職員として埋蔵文化財の発掘調査や史跡志波城跡の保存整備活用に携わり、地域住民との話で得られたものなどである。伝承の発生過程を幾つか調査検討し、地域に残る伝承の意義を考察した。この種の狭い範囲に残る小さな伝承の収集、調査、記録は、あまり行われることがないため、調査をすればもっと多くの伝承が得られる可能性があろう。

1. 史跡志波城跡の「金の鳩」伝説

(1) 志波城跡とは

岩手県盛岡市に所在する史跡志波城跡は、延暦22年(803)に、桓武天皇の命を受けた坂上田村麻呂によって造営された、古代陸奥国最北最大級の城柵である。

古代、東北地方の人々は蝦夷（エミシ）と呼ばれた。城柵は、東北地方の土地と人々を統治するために政府が造営した軍事と行政の拠点であり、北陸から東北地方に20数ヶ所造営された。

志波城跡は、昭和50年代まで太田方八丁^{おおた た ほうはつちょう}遺跡と呼ばれていた。昭和51年（1976）に東北縦貫自動車道建設のために行われた岩手県教育委員会による発掘調査によって、築地塀跡や大規模な溝跡、多くの竪穴建物跡などが見つかった。その後の盛岡市教育委員会によ

る範囲確認調査等により、『日本紀略』に記録の残る志波城跡であるとして昭和59年（1984）に国の史跡指定を受けた。

志波城跡は、東北地方東部を南北に貫流する北上川と奥羽山脈から東流する零石川の合流点から約4kmの沖積平野に立地する。外郭は一辺928m四方を幅5mの外大溝、その内側840m四方を約60m間隔で櫓が取り付く築地塀で二重に囲郭している。築地塀南辺中央には掘立柱の五間一戸の重層櫓門が建つ。城内中央やや南寄りに、一辺150m四方を築地塀で区画した城柵最大規模の政庁、その周囲に実務官衙域の掘立柱建物跡群、外郭築地内側約108m幅の範囲には全部で1200～2000棟あると考えられる兵舎の竪穴建物跡群が分布する。文献資料と発掘調査成果から、桓武天皇の徳政相論による行財政改革と、北を流れる零石川の氾濫被害を受け、造営約10年後に文室綿麻呂^{ふんやのわた まろ}が約10km南に徳丹城（矢巾町西徳田）を造営し移転したとされる。主要な建物は柱が抜き取られていることから、徳丹城へ運ばれたと考えられている。

盛岡市教育委員会は、調査成果を元に平成5年（1993）から保存整備をし、平成9年（1997）に志波城古代公園として整備完了した外郭南辺部を公開した（図1）。その後も平成28年度（2016）まで継続してⅢ期にわたる整備を実施し、広大な敷地に高さ11mの壮大な外郭南門や築地塀、櫓、儀式空間を表す政庁南門、東西門と築地塀、実務エリアの官衙建物、兵舎建物の竪穴建物群など、復元整備や遺構表示、ガイダンス施設「志波城古代公園案内所」などが整備された（図2）。

(2) 志波城跡に関する歴史

志波城跡の主要部分の地名は下太田方八丁である。

発掘調査では志波城以前の奈良時代の小規模な集落や志波城の平安時代初頭の遺構、近世以降の農村集落以外の遺構遺物はほとんど見つからない。北を流れる零石川が暴れ川だったことも要因かもしれない。しかし、古くから住む付近の住民は、周囲が洪水被害を受けても方八丁は洪水被害をほとんど受けないと言っていることから、特別な場所として何らかの規制、聖地的な扱いがあったのかも知れない。

江戸時代の盛岡藩の絵図には、方形区画の四方に開口部が描かれ、「方八丁 八幡殿陣場跡」と記されている（図3・4）。江戸時代の地誌にも八丁四方に土手が巡ることが記述され、築地塀跡が残っていたと考えられる。坂上田村麻呂が造営した志波城であることは忘れ去られ、江戸時代には盛岡藩を治めた源氏系の南部氏に縁のある八幡太郎・源義家が安倍氏と戦った



図1 志波城古代公園 外郭南辺

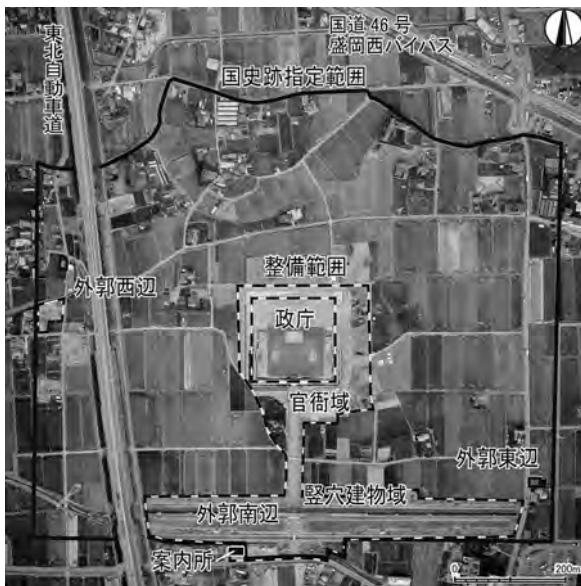


図2 志波城跡全景（盛岡市教育委員会 2017加筆修正）

前九年合戦の陣跡と考えられていたことがわかる。

(3) 金の鳩

志波城跡内で発掘調査を行った際、よく地元の人たちに「金の鳩はでたか？」と笑いながら話しかけられた。話を聞くと、昔から「方八丁の真ん中には金の鳩が埋まっている」と伝わっていると言う。どんなものなのか聞いても、金の鳩が埋まっていること以外は知らない、そして「みつけたら、こっそり教えてけで。」と笑顔で異口同音に言う。記録や昔話等には方八丁金の鳩伝説は見つけられず、周辺一部地域で語り継がれてきたものと考えられる。

古代蝦夷研究の第一人者であった故工藤雅樹氏に聞いたところ、鳩が源氏の守り神であることと関係があるかも知れないと御教示をいただいた。『吾妻鏡』には源氏の吉兆として鳩が登場し、鶴岡八幡宮の扁額の八の字は鳩である。近世以降の南部氏による八幡殿陣場跡説から、源頼義・義家が、自陣に守り神として金の鳩を埋めたと言いだされた可能性が考えられる。

地域住民が、ありふれた農地の広がるこの地が、実は歴史的な特別な場所なのだという記憶を誇りとして

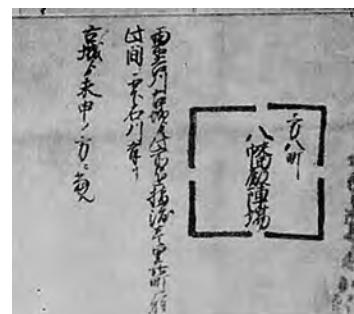


図3 「奥州之内岩手郡栗谷川古城図」（一部）
寛文 8年 (1668)、もりおか歴史文化館蔵



図4 「南部領惣絵図」（一部）
天保 4年 (1647)、もりおか歴史文化館蔵

代々受け継いできたものなのだろう。

なお、昭和51年以降に志波城跡政府域や城内各所で行われた112次以上にわたる発掘調査において、今のところ金の鳩は出土していない。

2. “ちょうえんぼう”の伝承

平成4年（1992）まで都南村だった盛岡市南部の永井25地割、西見前19地割地内に、8世紀を中心とした集落遺跡の荒屋遺跡が所在する。令和2年（2020）、この遺跡の畠約4000m²の宅地造成に伴う発掘調査の際に、関係者の高齢女性から「嫁いでからずっとこの畠を耕してきた。もう“ちょうえんぼう”ば耕せなぐなる。寂しいなあ。」と言われた。“ちょうえんぼう”とは何かと聞いたところ、昔“ちょうえんぼう”というお坊さんがいた場所だと聞いたがそれ以上のこととは知らない、とのことであった。周辺の古くから住む人たちに聞いたところ、同じようにこの畠には“ちょうえんぼう”というお坊さんがいた、すぐ脇に湧き水があり“ちょうえんぼう”がいた、“ちょうえんぼう”は北から来たらしい、との話を聞くことができた。しかし、“ちょうえんぼう”的詳細は誰も知らなかった。発掘調査においては、仏具や仏教施設跡は見つけられなかった。

盛岡市都南歴史民俗資料館の学芸員が、昭和61年（1986）の文化財調査員の報告に次のようなものが残っていることを教えてくれた。

長園坊（宮崎家）跡と伝えられる 昭和六三
十一四 吉田長一郎

都南村下永井二十五一四五藤川与次郎氏宅前五千平方米余、昔より長園坊跡地と伝えられ宮崎家の修驗道場があったと言われ、今も土地の人々は、その土地を「ちょうえんぼう」と言っております。

この根拠等は記録に無く不明であるが、本遺跡周辺が写った現地写真が添えられている。

これを手がかりに、江戸時代に地域に根付いていた修驗道関係から、この地における“ちょうえんぼう”

を探した。すると、“長円坊”という名前は江戸時代の修驗関係者名にしばしばみられ、一般的な修驗者名だったことが分かった。

宮崎家は、本遺跡の約400m南に所在する西見前の北野神社の別当職（統括者）を代々務めた家系である。近世期の盛岡藩の社寺を網羅した『御領分社堂』（宝暦10年（1760）頃成立）によれば、北野神社は修驗持ちの社堂であった。また、都南歴史民俗資料館所蔵の『神社佛閣由緒世代書上帖 志和郡年行司自光坊同行 賴光院』によれば、北野神社別当家の宮崎家は盛岡藩修驗年行事自光坊の傘下にあり、自光坊から見前村と永井村を霞場（修驗信者をまとめる縄張り）とする証文を得ている。なお、宮崎家家系図に“ちょうえんぼう”という修驗者の名前は見えない。

本遺跡の北約200mには多賀神社がある。多賀神社は盛岡藩士阿部兵部左衛門創祀と伝わり、『御領分社堂』によれば清九郎が代々俗別当を務めたとされる。代々の清九郎の中に“ちょうえんぼう”を名乗る修驗者がいたかは、家系図が見つけられず不明である。

また、『御領分社堂』には本遺跡約600m南の西見前にある曹洞宗清水寺に、寺院持ち社堂として「白山大権現」がみえる。清水寺はこの別当寺に位置づけられ、寺院領内に修驗院坊が存在した可能性がある。

都南歴史民俗資料館蔵『飯岡村圖面』（明治初期）によれば、発掘調査地点や西見前から永井にかけての広い範囲の地権者名に「藤川清助」の名前が見える。同館『菖蒲田家系図（写）』によれば、屋号が菖蒲田の藤川家は二代から九代まで清助を襲名している。清水寺の開創400年記念誌『清水寺史』によれば、慶

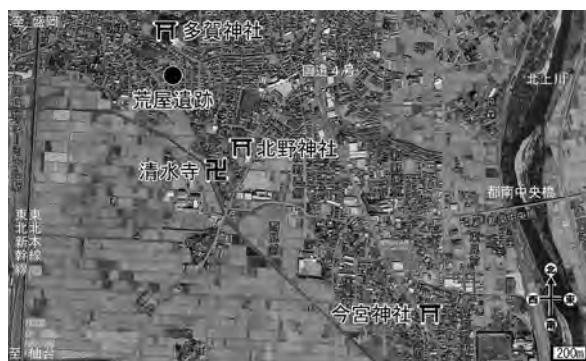


図5 荒屋遺跡周辺地図
(出典: 国土地理院ウェブサイト地理院地図 Vector に加筆)

応元年（1865）、「當宗門改書上帳」の西見前村・東見前村の筆頭に「清水寺 曹洞宗 清助」の名前が見える。広大な土地を所有していた菖蒲田家家系図の藤川清助の可能性が高い。また『菖蒲田家系図（写）』によれば、五代清助の項に「南部利敬公が今宮神社（東見前）を建立し、藤川家が禰宜を仰せつけられた。」旨の記載がある。『都南村誌』によれば、今宮神社は東見前にあったものが明治3年（1870）に北野神社に迎社し、明治35年（1902）に北野神社飛地の東見前に移転したとある。このことから藤川清助と北野神社別当宮崎家の関係の深さがうかがえる。同じく五代清助の項には、「清水寺に田を寄進。宮崎頼光院に宅地続畠一切寄進」の記載も見える。

以上を総合すると、次のような推測ができる。

江戸時代、見前村、永井村は北野神社別当家宮崎家の霞場であり、盛岡藩修験年行事の自光坊との関係を元に、周辺神社の修験関係者をとりまとめる力を持っていた。一方、この霞場の広範囲に土地を持っていた菖蒲田藤川家は、北野神社宮崎家や清水寺に土地を寄進し、藩主から今宮神社禰官を任じられるほどの力があった。宮崎家が、清水寺の白山大権現、俗別当清九郎の多賀神社、今宮神社のいずれかの祭祀を司る“ちょうどえんぼう”なる修験者を招聘または宮崎家の長男以外の誰かが“ちょうどえんぼう”を名乗り、藤川清助がその僧坊を置く土地として本遺跡周辺を提供したのではないかだろうか。この地に来た修験者が代々襲名したのか、吉田長一郎氏が指摘したような道場や僧坊名だったのか、宮崎家に請われて見前村や永井村よりも北の方から来た一人が名乗ったのかなど詳細は分からぬ。

想像を膨らませれば、江戸時代に数多くいたであろう修験者の中で“ちょうどえんぼう”的な名前だけが伝わっていることは、彼は特に地域に愛された宗教者だったのかもしれない。

3. 盛岡市厨川・安倍館町・前九年の地名

大正7年（1918）、現在の盛岡市厨川^{くりやがわ}1丁目地内に東北本線厨川駅がおかれた。周辺の江戸時代の地名や

絵図には、栗谷川城や上田通厨川村と見え、明治期には岩手郡厨川村、昭和15年（1940）に盛岡市に編入合併し今に至る。

『陸奥誌』には、前九年合戦（永承6年〈1051〉～康平5年〈1062〉）において、安倍貞任らが源頼義・義家らと戦い滅亡した地として「厨川柵」が登場する¹⁾。『吾妻鏡』には奥州藤原氏を平定した源頼朝が、先祖の戦跡を巡り「厨川館」に逗留したとある。

平安時代、大同3年（808）頃に鎮守府が国府多賀城から坂上田村麻呂が造営した城柵胆沢城（岩手県奥州市水沢）へ移された。鎮守府は対蝦夷政策の軍事的な役割を担ったが、後に陸奥国北部の奥六郡（今の岩手県南部から県央部）を統括するようになった。11世紀には安倍氏が俘囚^{ふしゅう}の長（東北の民である蝦夷の長）を名乗り、鎮守府と奥六郡の権力を握るが、国府に刃向かったとして源頼義・義家に滅ぼされた。その最期の地が厨川柵とされる。文献に登場する安倍氏が築いた地域拠点としての柵は、鳥海柵^{とりあいのさく}（国史跡・岩手県金ヶ崎町）などは場所が同定されているが、厨川柵の場所は判明していない。

江戸時代の絵図に栗谷川（厨川）城として描かれる場所は、厨川柵の擬定地のひとつだった。東側は南流する北上川へ落ちる急斜面の崖、西は街道筋、その東西に結ぶように堀切で区画された城館で、今も良好に堀跡が残る（図6）。昭和50年代以降の発掘調査では、16世紀を中心とした遺構遺物しか見つかっておらず、今目に見える遺構は鎌倉時代以降この地を治めた工藤氏の戦国期の城館の遺構であり、安倍氏の厨川柵といえる物証は無い。

盛岡市は昭和初期に主要な部分を買い上げ厨川柵擬定地として公園整備を行う計画だった。これは戦争激化により頓挫し、終戦後に引揚者の住宅用地として貸付し、今に至っている。

昭和期には地元有志が栗谷川城跡内に「貞任宗任神社」を建立し、ここで滅んだとされる安倍貞任・宗任を祀った。

このような中、昭和41年（1966）の住居表示施行にともない、地域住民の意見を反映し盛岡市厨川字の一部のうち、栗谷川城跡の周辺は「安倍館町」、その西

側は「前九年」という地名になった。文化財保護法に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地の遺跡名も「安倍館遺跡」となっている。

この地名の経緯から、この場所は安倍氏が滅んだ場所として地域の誇りであったことがうかがえる。今では、正式な地名になっていることから、前九年合戦で安倍氏が滅んだ歴史の地と理解している市民や観光客がいるのも事実だ。伝承が地名になり、歴史的事実と認識されているといえる。

4. 遺跡と伝承の価値の考察

(1) 地域伝承の発生過程

史跡志波城跡の「金の鳩」、荒屋遺跡の“ちょうえんぼう”的伝承は、狭い限られた地域に伝わってきたものである。伝承してきた人たちも真意を忘れ詳細は伝わらない。これは、ある時代の人たちが自分たちの土地が特別なのだと誇りに思った逸話を語り継ぎたいという思いで発生したものだろう。

安倍館町や前九年の地名は、伝承を元に昭和につけられた新しいものである。とはいっても、地域の誇りや歴史的逸話が根源にある点においては、昭和の江戸時代以降なのかという違いのみで、「金の鳩」や“ちょうえんぼう”と同じ理屈によるものと言える。“火のない所に煙は立たぬ”という諺もあるように、その伝承には地域が誇る歴史の一部を含んでいることがわかる。小さな伝承もその土地の個性を物語る歴史文化遺産である²⁾。



図6 安倍館遺跡 県道沿いにのこる堀跡

(2) 遺跡と伝承の価値

近年、文化財保護法改正をはじめ、観光立国や歴史まちづくり法など、歴史文化遺産を生かした地域振興や観光資源化がすすめられている。少子高齢化を迎える我が国の経済成長戦略と、歴史文化遺産保存継承のために、歴史文化遺産の経済的価値向上をはかると理解できる。この流れにおいては、総合的に歴史文化遺産を把握し、その中でも経済的価値を発揮できるシンボルとなる歴史文化遺産の観光活用が進められる。

一方で、この流れからこぼれ落ちる歴史文化遺産の方が圧倒的に多いことも事実だ。この施策には登場できない例示したような小さな伝承などの数多の有形無形の地域の歴史文化遺産は、地域の人々の誇りとなる可能性を秘めている。これは歴史文化遺産保存継承に必要な視点のひとつではないだろうかと改めて感じる。

地域資源・地域資産としての歴史文化遺産は、地域住民がどのように考えるかという点において、その地域における価値が異なる。地域資源・地域資産としての歴史文化遺産に対し、行政などが観光資源化などの経済的価値を向上させる施策をとり予算を投下しても、



図7 厨川・前九年・安倍館町周辺地図
(出典: 国土地理院ウェブサイト地理院地図 Vector に加筆)

地域住民がその歴史文化遺産の地域における価値を大切にしていなければ、施策と予算が尽きた時に歴史文化遺産を守る担い手がいなくなり、持続可能性を失い、経済的価値のみならず地域資源・地域資産としての地域における価値も低下することが懸念される。

遺跡、史跡、名勝、景観など土地固有の文化財、歴史文化遺産の調査研究成果や保護施策は、その土地の歴史にとっては新しい情報である。一方、土地に住む人々にとっては、真偽は別として長く語り継いできた伝承があることが、その土地が特別であると認識してきた証左である。

発掘調査や保存整備などに当たっては、その歴史文化遺産に対する地域の人たちの感じる価値を高めてこそ、持続可能な保存継承が見込まれるのではないかだろうか。

幅広いが小さな地域に根付いた活動の積み重ねが、地域住民が感じるその歴史文化遺産の地域における価値の向上につながる。このような側面が歴史文化遺産のもつ伸ばすべき価値のひとつなのではないだろうか。

【註】

- 1) 志波城跡の「八幡殿陣場跡」は、この戦いの際の源氏の陣跡という伝承がある。
- 2) 史実と勘違いされることは、歴史研究の周知広報不足である反省も含む。

【参考文献】

- 岸昌一 2001『御領分社堂』南部領宗教関係資料1 (有)岩田書院
 曹洞宗清水寺 1993『清水寺史』開創四百年記念刊行
 都南村 1974『都南村史』
 都南歴史民俗資料館所蔵「飯岡村圖面」
 都南歴史民俗資料館所蔵「神社佛閣由緒世代書上帖 志和郡年行事自光坊同行頼光院」
 森毅 1975『南部藩の修驗・山伏—南部藩領霞支配・堂舎の分布—』
 森毅 1989『修驗道霞職の史的研究』名著出版
 吉田長一郎 1988 調査報告「長園坊（宮崎家）跡と伝えられる」都南歴史民俗資料館
 吉田長一郎 1990「読み下し文 神社佛閣由緒世代書上帳」都南歴史民俗資料館
 盛岡市教育委員会 1981『志波城跡I 太田方八丁遺跡範囲確認調査報告』
 盛岡市教育委員会 2000『志波城跡 第I期保存整備事業報告書』
 盛岡市教育委員会 2016『盛岡市文化財シリーズ43：志波城跡と蝦夷（エミシ）』
 盛岡市教育委員会 2017『志波城跡 第II・III期保存整備事業報告書』